

*「さわやか福祉財団」二〇年のしごと

「新しいふれあい社会の創造」を旗じるしに

堀田力 さわやか福祉財団理事長に聞く

二〇一三年一〇月三一日

神宮前事務所にて

聞き手

尾崎美千生 元毎日新聞政治部副部長 高連協参与

堀内正範 朝日新聞社社友 「月刊文風」編集人 （「月刊文風」二〇一四年一月号）

二〇年間のしごとの総括から

尾崎…お忙しいところ、お邪魔いたします。堀田さんはたくさんのおしごとをなさってきておいでなので、はじめにこれまでの総括を伺えればと思うのですが、「さわやか福祉財団」を始められてから何年になるのですか。

堀田…二二年近くなります。前身の時代が九一年からあって、法人をとったのが九五年です。

尾崎…その後にはたくさんのおしごとをなさったと思うのですが、最初は何のおしごとから。
堀田…基本はいつしよですけれど、最初は高齢者を支える「共助のしくみ」から取り掛かろうということでしたね。当時はまだ「介護保険」がまったく姿をみせていなくて、高齢者を支えることが家族だけではやれないのは明白ですし、せめてボランティアで少しでもお役に立てればということ。もちろん「新しいふれあい社会の創造」というのは当時から今まで一貫している旗じるしですけれど。

尾崎…前職をお辞めになられて、すぐにこのしごとに就かれたのですか。

堀田…そうですね、すぐ烽火をあげて。というか、こういうことをやりたいから辞めさせてくれということ。

尾崎…定年とご一緒でしたか。

堀田…いや、定年より前ですね。六年前ですかね。

尾崎…前からそういうことをお考えになっておられた。

堀田…そうですね。

尾崎…その後で「名刺両面大作戦」の話をお聞きしたのですが。

堀田…いろんなことをやっていますけれども、「高齢者を支えるしくみ」から入って、しかしとてもボランティアだけでは支え切れるはずがないということ、ボランティア活動を広げながら、まず「NPO法人制度」をつくれという運動をやり、それから合わせて「介

「介護保険制度」をつくってくれという運動をやり、それぞれの制度づくり、アドボカシーですよね、中間支援団体づくりをやった。それをやってNPOの仲間たちの団体の運営がかなり安定したものになってきて、「介護保険制度」をやって高齢者を支える基本の仕組みができた。

わたしたちは、もともと高齢者を含めたふれあいの社会を目指していますから、「介護保険制度」導入前は、ボランティアがからだのお世話などの介護を手伝い、たいへんでした。それが制度としてできあがったので、団体に余力ができてきて、本来のふれあいにはいつていくことができました。

ふれあいですから高齢者に限らない。子どももみんな含めたふれあいということで、「居場所」などに重点を移しながらふれあいをはじめると、子どものほうもしっかりやらなければというので、子どもにボランティア活動をすすめる活動にも取り組みはじめました。

「ゆとり教育」のこと

尾崎…子どものほうというのは、どんな。

堀田…はい、「介護保険制度」もできたので、アドボカシーとしては「ゆとり」ですね、子どもにもっと「ゆとり」を持たせてということ。やったら「ゆとり」のところだけを取り入れたもので。

堀内…教育での「ゆとり」のところだけを。

堀田…これは二、三年で「脱ゆとり」の声が出始めましたが。しかし「ゆとり」のときに導入してくれた「総合的な学習の時間」、これはしっかり根付いて、「総合的な学習の時間」を使って、子どもたちのボランティア体験学習をおこなったり、横断的な学習に取り組めるようになりました。

尾崎…「総合的な学習の時間」というのは、文部省がはじめたのではないのですか。

堀田…そうです。文部省に訴えて。

尾崎…こちらから働きかけて。

堀田…「総合的な学習の時間」を働きかけたのではなくて、「ゆとり」を働きかけて、教育を通して生きる力を育もうということ、その花形が「総合的な学習の時間」です。「ゆとり」もまるごと取り入れてくれましたし、それまでの相対評価五四三二一をやめて絶対評価にするようにするというのを、これは取り入れてくれて今もこれは残っています。

堀内…それもあつたのですね。

堀田…けっこう文部省は取り入れてくれたのです。もちろん、こちらの主張しているところを、審議会をとおして形つけてですけれど。

尾崎…文部省の受け入れ方はそういうことだったんですか。

堀田…今でも絶対評価は残っているし、「総合的な学習の時間」も残っているのです。ちょ

っと減らされましたけれど。

堀内…「ゆとり」は微妙に違うかたちになって。

堀田…「ゆとり」については、わたしどもは、細かいことを覚えさせる必要はない、もつとゆとりをもたせろ。ただし好きなことはどんどん飛び級でやらせろ。勉強ができる子どもにはどんどん勉強させろという主張をしました。ところが、授業内容を減らすところだけを取り入れちゃったものだから。

堀内…現場が都合のいい「ゆとり」のほうに。

堀田…保護者に反発をくらって。数年でつぶれました。その「ゆとり世代」がいま世の中に出だしているのですが、「ゆとり世代」はだめだなんていわれていきますから、わたしどもの提言が悪評を生み出している。

堀内…本来の「ゆとり」でない意味での評価ですね。

堀田…それが「ゆとり教育」でしたね。少しでも子どもにボランティア体験をとというのが目的のひとつで、そういう子どものための提言や制度づくりもやって。それでだいたい高齢者、専業主婦、そして子どもと押さえてきたので、あとはサラリーマンです。働いている男性たち。これ人たちの社会参加をというので、「ワーク・ライフ・バランス」をやりました。

「ワーク・ライフ・バランス」のこと

堀田…珍しく企業も行政も労働組合も賛成してくれたのが「ワーク・ライフ・バランス」で、運動もしてくれたのだけれど口でいつてくれただけで、全然成果あがりませんでした。そこで、勤労者のボランティア体験とか、表彰とか、いろんなことをやりました。ところがこれもほとんど成果あがらず。いまでもつづけてやってくれている和歌山県とか、高知県とか、福岡県とかありますけれど、なかなか全国的に広がらず。で、最後の切り札で、「名刺両面大作戦」。あれはもう半分やけばちの運動ですけれど。

尾崎…あれは山手線の全部の駅を回りましたですね。

堀田…毎朝、全部、回りました。

堀内…たいへんでしたね。

堀田…あれはスタートしたときからの「新しいふれあい社会の創造」の考えのもとで、ボランティア団体五〇〇〇、学生は二〇〇万人、サラリーマンは一〇〇〇万人のボランティア参加という具体的目標を持って始めていまして、それを二〇年で実現するというのが、われわれの最初の目標でした。その中で子どもや高齢者などもかかわりましたけれど、ほかのものは一〇年ちよつとで目標を達しているのですが、サラリーマン一〇〇〇万だけが残っている。

それで二〇年目を迎えた二年まえに、やれることは全部やろうということ、名刺両面

大作戦」を山手線でやった。目標達成できないことはわかっていたけれど、やれることは全部やっておかないと悔いが残るということで取り組みました。あえなくほとんど成果なしで、ですからいまだに目標を達成していないのは、サラリーマン一〇〇〇万人のボランティア参加。

堀内…山手線の「名刺両面大作戦」にはちよつと参加させていただいたのですけれど。

堀田…ありがとうございます。

堀内…街頭で触れて感覚的に分かったのですが、企業の意識の遅れが辛かったですね。企業のほうが、パラレルキャリアとか年取ったらなにかやってもらおうと思っていれば、それを名刺の裏に書かせる。そうしないと高齢社会づくりに遅れてしまうという風潮がまだない。企業の反応というか後押しがないとムリでしたね。街頭でお願いすると、内容にかかわらずパンフを受け取ってくれない。内容よりも街頭で受け取ることを嫌う風潮もあつて。

堀田…企業のほうに「ワーク・ライフ・バランス」をやってもらわないと、こちらに反応がない。「ワーク・ライフ・バランス」は政府も経団連も労働組合も乗ってくれて、賛同してくれましたけれど。

堀内…それが名刺に反映しない。

堀田…あれが実質なんです。ワーク・ライフ・バランス」は形だけで、中味が伴ってい

ない。いまは子育ての団体と組んで、イクメンを広げる方に力を入れていきます。これは世界の潮流もあって実現しています。育児はやってくれるのだけれど、ボランティアまでいかない。

堀内…そこがちよっと。企業のほうの取り組みの問題ですね。

堀田…そうですね。ですからサラリーマンについては目標未達です。

堀内…未達ですか、ここがいちばん大きい。

「地域包括ケア」のこと

尾崎…そういう経過をたどって、いまは「地域包括ケア」のほうにはいっておられるのですか。

堀田…そうですね。

尾崎…それは震災があつたので、新たな展開にはいった。

堀田…「地域包括ケア」は、「介護保険制度」ができて五年目から。「介護保険制度」ができたところから、われわれは施設にいれず地域でみることをいってりましたが、制度創設のときには入れられなかったのです。

施設のほうに反対があると具合わるいし、だからたくさんの方の賛同者を募りました。政治家には反対者が多かったですけれど。各政党をまわりました。政策研究会からぼろくそに

いわれてね。「日本の文化、美風を壊すのか、家族がみる家族主義の美風を壊すのか」。保守・革新を問わず、男性議員はとくに。ある議員などは、法律が成立したあとまで抵抗していました。

制度はできたけれど、「在宅中心、地域包括ケアでやりましょう」という余裕は厚生省にもなかったし、こちらにもむずかしいことをいって、つぶれてはこまりますから。

尾崎…ぼくは『毎日新聞』において世論調査部長というのをやっていたのですが、その当時は家族でみるよりも施設でみるということでした。

堀田…施設主義ですね。

尾崎…いままた家族でみようというふうに変わってきているのですか。

堀田…いまは家族ではなくて地域ですね。家族でということとは一度もいったことはない。

家族はむり、家族は心と。からだの世話は家族ではむり、と。

尾崎…そうですね。

堀田…ただ地域でみる、というのはスタートのときは、そのゆとりが厚生省にもない。社会にもない。とりあえず通すということでした。通して五年ごとの見直し条項を付則で付けていますから、五年後の見直しのときに座長をやって、そこで「地域包括ケア」を打ち出して、それが受け入れられ、「地域包括支援センター」もその見直しのときにできました。

尾崎…主体になるのは「地域包括ケア」の場合はどういう人になるのですか。

堀田…地域全員です。ボランティアにも入ってもらおうというのがもともとの狙いですね。堀内…わたしのいる小さな町でも、ケアマネジャーがいちばん最後になりましたが、あと社会福祉士さんと看護師さんがそろって、中心になって三人ひと組でよくやってきています。三人がそろったということで、ボランティアのみなさんと力を合わせて。

堀田…五年目の改正のときに「地域包括ケア」が組み込まれ、しつかりボランティアのふれあいを組み入れて、地域全体で在宅で介護を支えましょうというふうになった。そして着々と進んでいるときに震災がおこった。

被災地での「地域包括ケア」

堀田…そこで被災地はゼロになったから、ゼロからつくるなら「地域包括ケア」をいれてつくりましたと主張しました。当時わたしが委員をしていた「税と社会保障の一体改革」で図面を示したら、菅直人さんが首相で、これはいいといって、テレビカメラにこの図面をみせて、まず先頭をきって、被災地はこれでやってください、といってくれたのです。

上はそれでよかったのですよ、法律もつくってくれて。自治体もというので復興構想会議でも打ち出してくれました。そして福島へは行っていませんが、岩手、宮城は両県ともに県の方針として、「地域包括ケア」で県のめざした復興を、といってくれた。ところが基礎自治体になると、これをいってくるところとそんなの無理だよというところに分

替えてくれないければなりませんし、病院が病院中心主義をやめて在宅医療主義に切り替えてくれないといけない。さらにそれぞれ切り替えただけでばらばらではいけない。包括ですからネットワークを組んでやらなければならぬ。そしてボランティアが立ち上がって支えてくれないと。医師と専門家だけではやれない。まわりの支えがトータル的に必要です。

尾崎…高連協内で論争になりましたが、地方には人がいるのに使わないで、公の人たちだけでやるので盛り上がらない。もつと民間のボランティアの人を使うべきではないか、と。ボランティアがせっかくやる気であるのに、公の人がやろうとしすぎるので盛り上がらない。

堀田…大もとの発想はいいが、ボランティアを使うという発想がまちがっている。ボランティアは使えません。主体的に気ままに動きますから。ボランティアとネットワークを組んでしっかりやらないと。

東北はボランティア活動が全国的にいちばん遅れていて、施設主義なんですよ。施設に入れてしまえという。そこから変えないと。ですからボランティアを組み入れる前の事業者の体制ができていない。東北には都市型のNPOボランティアはないのだけれど地縁で助け合うという、ボランティアということばは使わないけれど、助け合いはけっこうあって、これを組み合わせればいいんですね。

「地域通貨」のこと

尾崎…「地域通貨」というのが使われて話題になっていきますけれど、「ドンガバチョ」とか。それも「地域包括ケア」の一環としてやってもらえるのですか。

堀田…ふれあいを活性化させて、それを「地域包括ケア」につなげようということで。助け合いですよね。

尾崎…それを地域で必要な場合におカネのかわりに実際に使うわけですか。

堀田…助け合いにね。

尾崎…限られた場所です。

堀田…そうですね。被災者中心ですけど、いろんな助け合いをやってもらうときに利用します。病院に連れて行ってあげるとか、食事をつくってあげるとか、車いすを押してあげるとか、いろんな助け合いで使うことは始まっていますよね。

尾崎…「地域通貨」でいまのような助け合いをやる。

堀田…いくら隣同士でも、ちよつと病院まで連れてってくれとはいいいにくいですよね。「地域通貨」があるとそれがいえまますからね。すまないけど、これ何時間分わたすから、やってくれよ。何もなしではできなくなっている助け合いを、幅を広げて「地域通貨」でやりましょう、ということですね。

堀内…動きやすいし、わかりやすい。

堀田…そうですね。先進国ではみなそれぞれ広がっています。北欧はそれがなくても助け合いは行政が発達していますが、イギリスなどヨーロッパでも、アメリカでも、カナダでもやっています。

尾崎…日本でも自治体でやっているところがありますよね。

堀田…自治体はポイント制ですね。

尾崎…千葉県八千代市に住んでいますので、「千代紙」という名称をつけたらどうかなんて話しているんですが。

堀田…地域のみんなで相談して、いいものをつくってほしいと思っています。

男性サラリーマンの社会活動

尾崎…いろんなことをやってこられてきて、課題としてはやはり未達成の・・・。

堀田…「新しいふれあい社会」という視点から見ると、男性サラリーマンの社会参加です。男が家庭生活、地域生活に入ってきていない。これは日本社会の大きな特徴ですね。アメリカ、ヨーロッパに比べて、ここが目立つところなんです。だから社会全体として助け合い、支え合っているというのが頭打ちになって伸びない。原因はカネで幸せになろうという発展途上時代に住みついた競争主義、経済至上主義が抜けきれていないからです。

尾崎…経済も成長から安定への方向をめざすべきでは。

堀田…成長から安定へは一九七〇年代から八〇年代ですよね。安定成長自体も九〇年代には不況、「失われた二〇年」に入ったにもかかわらず、相変わらず政治はそっちにいきますし、働く人がそういう頭でいますから、なかなか地域活動、家庭活動をやらない。地域で支え合うしくみにつながらない。

尾崎…育児なんかも男性は積極的でないですね。

堀田…男性も「市民後見人」なんていうのは、ちょっとカッコがいいものだから、面倒をみてやろうという立場で、その辺はやってくれるのですけれど。いっしょに車いすの人を押してあげましょうとか、いっしょにいろいろ楽しみましょうとかを地域ではやらないですよね。

これからの課題について

堀田…これからの課題について、いくつか違った角度からうかがいたいのですが。堀田さんがおっしゃっている男性の高齢者、もつと絞っていえば六五歳以上の元気な高齢者。「支えられる高齢者」は介護、医療、有訴が出てきた人たちで三割くらいで、あとの七割くらいの高齢者は元気で暮らしている。三〇〇〇万人のうちの七割の人たちが、堀田さんがおっしゃるように社会活動に入らない、入れない。このところが最大の問題になっている

のですね。

堀田…はい、そうですね。

堀内…地域で動いているのはNPOの人とか、周辺の人と共通の関心を持ってつきあっている人。ですから水玉模様とでもいうのでしょうか、大きくはならないし、また無理して大きくする必要もない。五人、七人とか、共通の関心で小さく動いている。それでも重ければ全体としては同じになるのですから、自治体のほうも小さい動きを大事にしていくのがひとつかなと。

これは堀田さんが七月の東京フォーラムのときに、これからの課題として「地域リーダー」のことをおっしゃっていたのとながらなのですが。NPOのようにテーマも大事だけれども、もっと手前のところで自分が暮らしているところでも含めて周辺の人たちといろいろ話合いながら中心になる人と場をつくる。われわれも地域でそういう形の活動を中心に置くようにしましょうと。

堀田…はい。そうですね。

堀内…もし地域でそれが国民運動としてできれば、国防軍の増強はいらなそうですよ。安倍さんがやろうとしているけれど、地域でみんなでやればそれは国を守る意識を醸成することになる。大げさにはないけれど、家族をまもって地域をまもって、高齢者が自分の経験を活かして動いてくれれば平和主義ですし、民主主義ですし、現場主義です。そ

こへ六五歳以上の「支える高齢者」が、なんとか見えるように動いてほしい。問題点としてあげてみたのですが、具体的にはどうしたらいいのでしょうか。

堀田…社会保障費の増大により、国の財政がきびしくなっているので、サービスを減らしていかざるをえない。そこで政府の「社会保障制度国民会議」が提言したひとつが、介護保険のなかの軽度者へのサービスをやめようというものです。現行では要支援が一・二、要介護が一・五となってますが、要支援の一・二の方に対する生活支援を制度の枠からはずし、市町村に移管しようという内容です。それで厚生労働省はその方向で動いて、「国民会議」の答申が出たのが八月で、九月にはもう閣議決定して、それを一五年度から市町村に移す。いま法案をつくってありますが、たぶん今国会中に基本的な方向は法律の形になるでしょう。しかしおカネを減らし質を落とすとしても、サービスはやめるわけにいかない。堀内…それはありえないですね。

堀田…やめることは不可能ですから、市町村はいままでのようなサービスをつづけますといわざるをえない。それを税金を減らす方向にいかうとすれば、税金のかわりに労力を提供するよりない。

それでボランティアの労力でやりましょうというのが、わたしどもの最初からの主張ですし、それはみなさんも賛成ですから。それをどういうふうにして、おカネではなしにボランティアの労力の提供で、サービスの質を落とさず、むしろ上げる方向にいくかを至急

勉強しなければいかんのではないかということ、わたしがしかけて、一一月五日から勉強会をはじめます。

「地域コーディネーター」のこと

堀田…会のメンバーは「介護保険制度」をつくった中村秀一さん、「国民会議」の室長（事務局長）をやっておられ、厚生労働省の局長をやられた人とか、もちろん厚生労働省も担当課長などが出てきてくれる。それから介護保険制度創設の働きかけをしていたところからずっと一緒にやっている仲間、たとえば菅原弘子さん、彼女は自治体のニーズを掴んでいきます。「地域ケア政策ネットワーク」をつくって、一〇〇人以上の志のある首長を集めてやってくれていますから、菅原さんを巻き込んで。この五日から勉強会を始めます。

堀内…仕掛けの時期なのでね。

堀田…それに社会福祉協議会とか、関係のあるところを巻き込んでいきます。そこでどのようにボランティア活動を広めていくかということで、地域にそういうしくみをつくる「地域ケア会議」、これはすでに厚生労働省が提言してくれていますけれど、これにしっかりとボランティアの人たちを入れるしくみをつくるとともに、「地域ケア会議」の事務局として、すべての地域包括支援センターを利用し、その下にこれからわれわれが勉強会で検討して提言するつもりでありますが、「コーディネーター」を置く。

堀内…コーディネーターですか。

堀田…コーディネーターを各地域に養成する。このコーディネーターが各地のボランティア団体をづくり出し、そこがいろんなサービスをする。そしてつくったボランティアがいろんな団体と包括的にネットワークを組んでやる。そういうことを全国的に推進しよう。それにサラリーマンOBを起用する。おしめをかえよといっても、めしつくれといったってやりませんから。

堀内…それもやるようにならないと。

堀田…コーディネーターをつくれとか、団体を運営しろとか、地元の地域に暮らしていないがらやっていない人を引っ張り出してくれとか、やってもらうことはたくさんあります。

堀内…そこへフオーラムでいっておられた「地域リーダー」が出てくる。

堀田…そうそう。この人は有給で。

堀内…あ、有給ですか。

堀田…有給で、責任をもってやってもらわないといけませんから。それを全国レベルで養成していこうというのです。そのしくみを検討しようということで、仕掛けをおこなっているところですよ。いままでわたしはボランティアでやってきましたが、ボランティアはどうしても出てこない。

堀内…有給のコーディネーターで、これが大事なところですね。

堀田…有給でコーディネーターを引っ張り出す。そういう人を養成してうまく動いてもらう。

堀内…それはイメージありますね。町で出会ったりする中に、おしゃべりで物知りで、コーディネーターむきの人がいます。たぶんどこにでもいるのでしよう。その人を有給でコーディネーターに置けば、さまざまな能力を持つかなりの男性を集められる。

堀田…ええ。カネを出すというと出てくる。企業人で優秀なネットワーカーをやらせていた人は、こっちでも使えます。おしめはかえさせない、めしはいい、組織をつくれ。それを各地域に置いていく。いままでは大もとからボランティアでしかけてきたけれど、どうしても無理なところがある。そこでコーディネーターにボランティア精神をぶちこんで、みんなに伝えてもらう。

堀内…いいですね、イメージがあります。「シルバー人材センター」ですが、あそこに集まっている人のほうが、集まってくるしごとよりはるかに知識も技術も優れて高い。その人たちの能力を使いきれしていない。

堀田…そうですね。シルバーサービス振興会も勉強会に入れていきます。こういうものには乗ってきます。

堀内…そうですね。もったいない。

尾崎…いつごろまでに制度はつくられますか。

堀田…三月までには提言をまとめますし、こういうことを考えているということは、一月の半ばころには烽火だけは上げようと思っっています。そうしないと政府のいろんな審議会が動いていきますから、カネでやる事業者なんかが出てきて、その方向へ進んでいってしまうことになるかねない。なんのために国から切り離れたんだということになってしまう。

そうなることが目に見えていますから。それほどカネを使わずに元よりもいいものをつくる手がある、と。それをわれわれが提言するから、ちよつと待つとれ。そういう提言を何人かが集まって出します。もうその文書も書きました。みなさん賛成してくれています。堀内…烽火を上げたら一気に進みますね。

尾崎…高連協の活動もそうですが、年寄りのほうに力をいれていくと、若い人たちとの間に格差が開いていく。それについて堀田さんはwin・winの関係をつくるのがいい、とおっしゃっているわけですが、具体的にはどういうことを考えておられるのですか。

堀田…それは今度の増税分というと、七〇〇〇億円は子どものほうに回すことで、増税のところ子どもを入れていきますし、それからボランティア提供分では高齢者ばかりを支えるのではなく、子どもも支える、育児も支える。そういう活動をすることによって、高齢者には生きがいをつくりだす。元気になりますから介護予防になるんですよ。

やることなしでボケつとっていると、どんどん体力が落ちていきますけれど、楽しいことをしていると元気になる。高齢者が子どもをみる。今度のネットワーク制度「地域コー

「デイナーター」ができたなら、単に高齢者をみるだけのボランティアではなしに、子どももみてもらう。制度にちゃんと乗ってきます。

尾崎…そうですね。

堀田…乗ってきますなんて、一人で勝手に言っていますが、いま誘い込んでいますよ。もうキーパーソンは引っぱりこみましたから。

堀内…見えてきましたですね。

堀田…反対する人はいないですから。

ニシキを飾らないふるさと回帰

堀内…堀田さん、どんどん増えている地域の健全な高齢者のことで、これは尾崎さんといっしょにお会いした民主党長老の藤井裕久さんとも話したのですが、定年後に地域にもどってくる高齢者、UターンにせよJターンにせよ、田舎へ帰って暮らしたいという人たちが、大きな家をつくってニシキを飾りすぎるのではないか。三分の一ぐらいの資金で家をつくって、三分の一ぐらいは地域のために使う。そこで暮らすのですから、地域で資産なり知識なり技術を使う。エイジング・イン・プレイスですよ。

特急を使って東京へ出てむかしの友人と語り合う、それも必要なかもしれませんが、地域への帰り方が違うのではないか。呼びこむほうの地域も、ニシキを飾って帰ってこな

くてもいい、ふつうに帰ってきてというくらいいい。次男坊三男坊ならさりげなく帰ってきていっしょにやればいいと思うんですが。そういう運動というか、意識の転換があまり言われていない。

堀田…今度のしくみづくりでも提言しますけれども、ボランティアでやるにしても、団体の運営資金とかある程度のおカネは必要なわけです。その程度は行政も出せるでしょうが、行政に出してもらおうと仕切られますので、われわれの寄付金でやりたい。

堀内…その通りです。かなり持って帰ってくるのでしようが、出すしくみがない。

堀田…ボランティアを支える運営資金は、「ふるさと寄付基金」でまかなう。「ふるさと寄付基金」は、東京において活躍しているふるさと出身者にも、もちろん寄付してもらおう。ここで大口寄付者は表彰する。そうすると地域に帰ってきて大きな家を建てて地域に関心がなく寄付していかないのは軽蔑される。地域のために寄付した人は尊敬されるし歓迎される。そういう社会的空気を醸成しようと思っっています。

堀内…いいですね、その通りです。

尾崎…安倍さんはそれに気がついていない。

堀田…言ってもわからないですね。安倍さんが出てこなくてもそれくらいのしくみは作れますから。よけいなこと言いに行つて、反対とかいわれたくない。センスがない。

堀内…いちばんない。もうひとつ、地方の活性化では観光。いつからそうなったのかはわ

かりませんが、観光というとお風呂にはいつて風物をみて帰ってくる。それはそれでいいけれど、もっと「物産観光」みたいな感覚で、ある町へいったらその地域の物産とともに作っている人に会うとか、そうすると物産も外へ出るし、関係も深まるし。観光自体がちよつと違うんじゃないか。

堀田… そうですね。

堀内… やれば観光業者だってやれなくはない。

「健康大国」について

尾崎… 大きな話になってしまっていますが、国づくりというか、第三の改革という言い方もありますけれど、人口問題をやっていましたときに、亡くなった黒田（俊夫）先生が、「健康大国」というのをめざすべきだといっておられた。健康寿命は世界一だし、健康について悪くいう人いないわけで、そういう国づくりはいいかないと考えていますが。

堀田… 「健康寿命」というのは、世界的にいわれておって、厚生省も医師会も力をいれている。それ自体には賛成しているのですが、それにプラスアルファして言っているのは、「健康寿命」を重視するのはいいけれど、そうなると健康でなくなった人はダメな人とかか寿命は意味のないという視点につながる副作用が起きるということです。

「健康寿命」の重要さを強調しながら、一方で健康でなくなった人の人生もまだまだ人の

役に立つ、能力を活かすことが可能なので、そういう人の能力も活かすようなボランティアを強調しています。そっちがおろそかになってしまつては困ります。

平均寿命の男女差のこと

堀内…高齢者の男性の寿命は、女性とのあいだに六年から七年の差があつて追いつかない。そのことについて、ことし八〇歳でエベレスト登頂をした三浦雄一郎さんは、男性も「アンチ・エイジングをやれ」といっています。女性だけがアンチ・エイジングをやっている。男もやるべきだ。もつと男性はいろんなことで動かなければ。

長く企業にいたからからだの使い方が固定してしまつているので一度ほぐしてやる。家庭でも雑事を奥さんにまかせないでいろんなことをやる。からだ全体をつかう。「老成」ですか、早く年取つて見せるみたいな日本の風潮があります。逆ではないか。「からだ」と「ころ」と「ふるまい」と、それぞれにアンチ・エイジングをしていかないと追いつかない。堀田…寿命の研究はいろんな研究がありますけれど、寿命をのばす研究は、アメリカで三〇年か四〇年かずつと同じ人たちが継続調査をやつていて、自分が困つた時に相談できる人の数と健康に相関関係があつて、それが寿命の長い短いでは有意の成果が出ている。栄養面の比較もあるのですが、粗食でも長生きしたりで、あまり成果が出てこずに、そういう精神面の困つたときの相談に成果が出ている。

やはり引きこもって歯を食いしばってがまんしているのはダメです。われわれの「新しいふれあいの社会」というのは、健康にもつながるのかなど。はじめてからのデータにそういうものもあります。ですから三浦さんは正しいことをおっしゃっている。

堀内…わくわくするような夢をもて。

堀田…やることあつたら元気です。日野原先生もそうです。

戦争の悲惨さを現役に語る

堀内…最後に堀田さんにかがうべき大事なことがあります。昭和六年ですが満州事変がはじまった。そのころに国際的に孤立していきました。それから国民が具体的に冷静にもを理解するのではなくて、わっと燃え上がってしまったような風潮があつて、これはジャーナリズムの問題ですが。金融緩和もそうですが、そういうものがまた目立ちだして。そこに敏感に感じる人たちは大正生まれや昭和のはじめの人で、六五歳以下の現役はまったくその芽に気がつかない。

堀田…そうですね。

堀内…そこに安倍さんの周辺、石原（慎太郎）さんなどの動きもあつて「軍国化」がすみ、国際的に孤立を強めてしまう。これを抑えないと。ジャーナリズムは双方の考え方を冷静に伝えて判断する。そして平和の証である「高齢社会」を、高齢者が参加して地域に

こしらえる。地域での運動によつてはじめて日本人が民主主義と平和を自分のものにする。いまの平和はこしらえたものではない。与えられ育ててはきましたが。それをやって初めて「歴史から学び歴史をつくる」いま大事な時期ではないですか。

堀田…そうです。

堀内…これ間違えるとまた何十年かあとに・・・。

堀田…大変なことになると思います。

堀内…非常に大事な時期であつて、「地域での高齢社会づくり」が国際的な平和へのメッセージであること、それをはっきり大きな声でいつてくれる人たちが少ない。何人かのひとりで、堀田さんと樋口さん。

堀田…それは声高にいうと主義主張になつて反対の人が出て、これは単なる対等な立場になつてしまつて説得できない。やっぱりみんなが事実として戦争の悲惨さを知っている人が語る。戦争を知らない、見ていない層にそれを聞いてもらう。このころに生きていた人だつて中曽根さんのようにいい思いをした人にはわからない人たちもいますが、悲惨さを知っている人が語ることが説得方法ですね。

堀内…そのためには「憲法改正」の議論はいいですか。議論しないことには若い人に伝わっていかない。平和の側から議論するのはいいですか。

堀田…そうですね、戦争はぜつたいにいけない、そこからはじめる。

尾崎..品川（正治）さんなんかは惜しかったですね。もうすこし話を聞いておけばよかった。

堀田..品川さんは経験をもっと語ってほしかったですね。惜しいです。

堀内..なんとか元気な男性の高齢者が、地域参加できるようなしくみをぜひつくってください。

尾崎..ではそろそろ。お忙しいところを長くなりました。

堀田..いえいえ、ありがとうございます。

（『月刊丈風』二〇一四年一月号）